

南浦和中だより

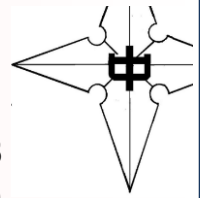
〒336-0026 さいたま市南区辻 6-1-33

TEL 048(863)0753

FAX 048(836)1589

さわやか相談室直通

TEL 048(837)5909



『虹とスニーカーの頃』

校長 おお こう うち のり かず 大河内 範一

もう20年ほど前、私が担任をしていた頃の話である。クラスにいたIさんは、実に真面目で学校生活に一生懸命取り組む、申し分のない生徒だった。ただ、本人が悩んでいたことがひとつだけあった。足の形にちょっとだけ特徴があって、靴選びに苦労していたのだ。サイズが合っていても、足と靴が当たる部分が痛くなるらしい。

当時の校則では、登下校時の靴は「白」に限定されていた。Iさんとお母さんは、自分の足に合う白い靴を求めて、何軒も店を回った。そしてようやく見つけたのが、白をベースに、ほんのり淡い色のラインが入った靴だった。

Iさんからその経緯を聞き、どうしたらよいかと相談された。私は少し思案した後、Iさんに「白い靴が見つかるまで、なんとか探し続けるように」と答えた。

その夜、Iさんのお母さんから電話があった。「先生、私たちは何日もかけて、思い当たるお店をすべて回りました。でも見つからないのです。娘の足に合う靴は、今はこの色付きしかないんです。信頼している担任の先生だから、あえて言わせてください。『白い靴を探し続けなさい』ではなく、この色付きの靴を履かせてもらえるように、学校と掛け合ってくれませんか。先生の力を貸してほしいんです」

私は胸がえぐられるような思いがした。あの頃の私は「教師たるもの、決まり事は何が何でも守らせなければならない」ということに、がんじがらめになっていた気がする。担任としてやるべきことは、別のところにあったのではなかったか。「校則を守る」ことと「その生徒にとっての最善を考える」こと。教育の現場で、どちらが本質なのかを突き付けられた出来事であった。

さて、話を現代に戻そう。文部科学省や市の教育委員会が進めているものに「校則見直しプロジェクト」がある。いわゆる「ブラック校則」と揶揄されるものもあり、校則の内容によっては、世間の理解を得られていないものも多いことを痛感する。

本校では、色の制限をなくす方向で舵を切っている。(私がアート好きだからというわけではないけれど…) しかしながら、決まりがなくなるというのは、何をしてもよいということではない。学校は、みんなで過ごす場所である。集団生活の場にふさわしいものを、自分で考え、自分で判断する力が求められるのである。自由って、責任を伴うものなのだ。そして我々教員も、「決まりだから守りなさい」という指導から、「自分で判断して生きていく」ことを支援する指導へと変わっていく。今の流れは、むしろ学校が好転していく兆しであると捉えたい。

Iさんが履いていた、白に淡い色が入ったスニーカーは、彼女にとってもよく似合っていた。そしてそれは、人の痛みや願いに気付くきっかけとなった。空にふと現れる虹のように、誰かの心にそっと寄り添える瞬間を、これからも大切にしていきたい。